

1 実施概要

全国学力・学習状況調査は、文部科学省が全国的な義務教育の機会均等と水準向上のため、教育施策の成果と課題を検証し改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や改善に役立てることを目的として、全国の小学校6年生と中学校3年生を対象に、平成19年度から実施されています。

令和4年度は市内、小学生694名、中学生618名が参加し、4月19日に調査が実施されました。調査内容は、毎年実施されている国語、算数・数学と学習意欲や生活状況等について尋ねる児童生徒質問紙調査に加え、本年度のみ、理科が調査内容に追加されました。

本市においては、年間を通して、「京田辺市学力向上対策会議」を開催し、学力調査の分析結果を活用して、児童生徒の学力を一層向上させるために、各小中学校及び関係諸機関と連携を図りながら、各小中学校における教育指導の充実や学習状況の改善、教育施策の成果と課題を検証し、教育に関する継続的な検証改善サイクル（PDCAサイクル）を確立し、その改善に向けた取組等を進めています。

2 学力調査の結果概要

【全般的な概要】

○小・中学校において、国語、算数・数学、理科ともに、全国（以下「国」とする）及び京都府（以下「府」とする）の平均正答率を上回っており、一定水準以上の学力が身に付いていると考えられます。中でも、「知識・技能」「思考・判断・表現」の評価の観点において、国や府よりも高い水準であることがうかがえます。

しかしながら、小学校では「書くこと」、中学校では「説明すること」に関する解答は、どの教科においても正答率が低くなり、無回答率が増える傾向にあることから、「思考・判断・表現」に関する領域については、今後の課題として捉えていく必要があります。

【国語科の概要】

○小学校では、すべての内容・観点において、国や府の平均正答率を上回っています。また、無回答率をみると、どの問題においても国や府に比べて割合が低く、粘り強く問題と向き合おうとする姿勢が見られます。しかし、互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、自分の考えをまとめること、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つけることに課題が見られました。

○中学校では、各内容・観点において、概ね国や府の平均正答率を上回っています。特に「言葉の特徴や使い方に関する事項」において大きく上回りました。また、無回答率をみると、どの問題においても国や府に比べて割合が低く、真摯に問題を解き明かそうとする姿勢が見られます。しかし、「行書の特徴を踏まえた書き方について説明したものとして適切なものを選択する」問題には課題が見られました。

【算数科・数学科の概要】

○小学校では、すべての領域・観点において、国や府の平均正答率を上回っており、基本的な知識・技能は十分に身に付いているといえます。一方で、考察し、説明する趣旨の記述解答が求められる思考・判断・表現の正答率は国や府を上回っているものの十分とはいえない傾向にあり、基礎的な知識を活用して解く問題に課題が見られます。中でも、複数のデータを組み合わせたり、目的に応じてデータを利用したりして、示された場面に応じて解答する等、日常生活場面においても、目的に合った概数の処理を考慮することや、数量が変わっても割合は変わらないことに課題が見られます。

○中学校では、すべての領域・観点において、国や府の平均正答率を上回っています。特に発展的な問題に関する正答率が高くなっていました。一方で、「素因数分解」「反例」の正答率に弱さがみられ、中学1・2年生で学習した内容が定着していない状況もうかがえます。また、「データの活用」領域では、活用するデータの特徴や目的に応じて考察することに、課題がみられました。

【理科の概要】

○小学校では、すべての領域・観点において、概ね国や府の平均正答率を上回っています。一方で、「生命」や「地球」を柱とする領域では、観察などで得た結果を複数の視点で分析したり解釈したりしながら自分の考えをもつことに課題が見られました。また、「エネルギー」を柱とする領域において、自

然の事物・現象の理解に弱さが見られます。

- 中学校では、すべての領域・観点において、国や府の平均正答率を上回っています。しかし、「エネルギー」を柱とする領域における知識・技能の問題において正答率が低く、既習内容の用語理解に課題が見られます。また、記述問題や、選択肢の文章が長い選択問題において誤答が多く、「書く力」や「読む力」に弱さが見られました。

3 質問紙調査の結果概要

【生活習慣について】

- 小・中学校ともに、「朝食を毎日食べる」「就寝・起床時刻が決まっている」など、基本的な生活習慣が身に付いている児童生徒の割合は高い水準を維持しています。今後も引き続き、規則正しい生活習慣の確立に向け、家庭での習慣づけをお願いいたします。

【学習習慣について】

- 全体的には、概ね家庭学習（宿題・習い事を含む）を行っており、計画を立てて取り組んでいます。特に中学校では、全国平均・府平均を約4ポイントも上回っています。今後も自分で計画を立て学校の授業の予習・復習や自らの課題に向けた学習をする習慣を付けていくことが大切となります。また、読解力・言語能力の育成とも深い関係がある読書に関する質問については、30分以上の読書時間の割合が小学校では全国平均・府平均を上回っていますが、中学校では低く、小学校・中学校ともに読書を全くしない児童生徒が3割前後もいます。学校や家庭において言語環境を整え、読書に親しませ、言語活動の充実に努めていくことが大切です。

【自分自身に関することについて】

- 小学校・中学校ともに「人の役に立つ人間になりたい」と思う児童生徒の割合が高く、「将来の夢や目標を持っている」と答えた割合は全国平均・府平均を上回り、将来の自己実現への意識を持って生活していることが伺えます。しかし、「自分で決めたことをやり遂げる」「失敗を恐れず挑戦している」「自分の思っていることや感じていることを言葉で表す」といった項目において、全国平均・府平均よりも低い傾向が見られます。物事を最後まであきらめず、やり遂げた後の達成感を味わいさせながら自己肯定感を養っていくことが大切と考えます。

【学習への関心について】

- 「学習した内容について見直し、次の学習につなげることができる」や「国語の勉強は好き」などの教科への興味を問う項目において、小学校・中学校とも全国・府平均に比べて低い傾向があります。児童生徒の興味・関心を高め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に努めていきます。

【ICT利用と学習への関わりについて】

- 「携帯電話等の使い方について、家の人と約束したことを守っている」、「授業でコンピュータなどのICT機器を使用した」等のICTの利用と学習への関わりにある項目において、小学校・中学校とも全国・府平均に比べて高い項目が多く、特に中学校の「学校でICT機器を活用して意見交換したり調べたりする」項目は大きく全国・府平均を上回っています。児童生徒達はルールを守りながら、学習へのICT機器活用ができていくことが伺えます。今後も授業改善に努めICT機器の効果的な活用をしていきます。

4 調査結果の分析を踏まえた今後の改善方策

【全般的な方策】

- 学習指導要領の確実な実施に向けて、タブレット端末等のICT機器を効果的に活用しながら、児童生徒の学びを深める授業づくりや個に応じた指導の充実に今後も進めてまいります。また、各校において、特色ある教育課程を編成し、個別最適な学びや協働的な学びを活かし、主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善を更に進めていくとともに、各中学校ブロックにおいて、小中連携を活かしながら、9年間を見通した学習のつながりを大切にされた教育活動の充実に努めてまいります。
- 学校で学んだ学習が、「知識・技能」に偏ることなく、それを活かした「思考・判断・表現」を相互にバランスよく育成しながら、大人になってもずっと役立つ生きた学びとなるように、生活場面と学習との関連性を重視した学習を展開するとともに、本やインターネット（タブレット端末）を活用した調べ学習等、子どもたちの主体性や学習意欲を引き出す探究的な学習を引き続き行ってまいります。

【国語科の重点的な方策】

- 小学校では、話し合い活動で、目的を意識させたり、互いの立場を整理させたりしながら様々な視点で検討した上で自分の考えをまとめることができるよう指導してまいります。また、「書くこと」の学習では、文章を書いた後の指導を充実させ、自分が書いた文章の目的や意図を相手に伝えたり、友達の書いた文章に対する感想や意見を具体的に伝え合ったりする活動やそれらを通して自分の文章のよさを見つけたりする活動を行いながら、主体的・対話的で深い学びによる授業改善に努めてまいります。
- 中学校では、書写の指導を改善し、「行書」について触れ、文字を整えて早く書くことができるようにするとともに、書写の学習で身に付けた資質・能力を各教科等の学習や生活の様々な場面で積極的に生かす態度を育成する指導に努めてまいります。また、定着した「知識・技能」を活用し、目的に応じて必要な情報に着目して要約する、場面と場面、場面と描写などを結びつけて内容を解釈するなど条件に合わせて読解ができるような指導の工夫改善を行ってまいります。

【算数科・数学科の重点的な方策】

- 小学校では、長い問題文や、複雑化した問題文において、情報を整理し、必要な情報を見つけたり、取り出したりする力に弱さがあるため、日頃から問題文の中にある必要な情報に着目させることを習慣化させるようにしていきます。また、複数の情報を総合的に捉えたり、それらの情報を組み立てたりして、問題を解く力をつけるために、解法を説明する問題などを活用し、図・式・言葉を使って、筋道を立てて説明できる場を設定しながら、主体的・対話的で深い学びによる授業改善に努めてまいります。
- 中学校では、「素因数分解」や「反例の意味理解」等、既習の学習内容については、ふり返りや復習を通して、定着を図ることが有効であると考えられます。また、様々な資料やデータから必要な情報を取り出し、活用する学習活動を積み重ねていくとともに、その学びを日常生活と関連付けて考えていくことにより、学びがより深まり、生きた学びにつながるよう授業改善に努めてまいります。

【理科の重点的な方策】

- 小学校では、学習で得た知識をより深く理解できるようにするために、問題解決を通して習得した知識を使って、日常生活との関わりの中で捉え直す場面を設定したり、他者との意見交流や協働的な学習の中で考えを深めさせたりすることで、次の学習や生活などに生かすことができるよう授業改善に努めていきます。また、理科の問題に対するまとめを行う際には、観察・実験の結果の具体的な数値や、分析した内容などを根拠として自分の考えをもち、その内容を文章で表現できるように指導してまいります。
- 中学校では、日常の学習において主体的に問題解決に向かえるように仮説を立て、他者との対話や議論を通して実験や観察の場を充実させることを重視していきます。さらに、問われていることを理解できるようにするために、問題文を丁寧に読むことを指導してまいります。また、理科に関する既習用語の意味を丁寧に確認し、理解を深めていけるよう指導してまいります。

【質問紙調査に係る重点的な方策】

- 家庭学習と学力の定着には、強い相関が見られます。予習・復習、自らの課題に向けた学習などを計画立てて学習できるように、各校において引き続き、より質の高い家庭学習や自学自習の習慣化の確立に向けた取組を進めてまいります。家庭におかれましても、ご協力をお願いします。

5 最後に

本市教育委員会では、社会が急激に変化し、予測困難な時代を生きる“これからの子どもたち“が、学校・家庭・地域の中で、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に身に付け、生き生き・のびのびと成長していくことを願っています。

本調査の結果だけで、学力等の全てを表すことはできませんが、これを1つの指標として、児童生徒一人一人の学びや生活を充実させ、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むために、各小・中学校で有効に活用し、京田辺っ子たちの学力充実に向けて、一層の努力をしてまいります。

保護者をはじめ、市民の皆様のご理解とご協力を今後ともよろしくお願いいたします。